⑦宮部みゆき著「あんじゅう　三島屋変調百物語事続」（中央公論新社・1890円）
⑧柴田トヨ著「くじけないで」（飛鳥新社・1000円）
⑨京極夏彦著「西巷説百物語」（角川グループパブリッシング・1995円）
⑩シルク著「シルクのべっぴん塾」（ワニブックス・1200円）
5―11日・高松・宮脇書店本店調べ

東京

①中島京子著「小さいおうち」（文芸春秋・1660円）
②マイケル・サンデル著「これからの『正義』の話をしよう」（早川書房・2415円）
③岩崎夏海著「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」（ダイヤモンド社・1680円）
④綿貫智人著「リストラなう！」（新潮社・1365円）
⑤副島隆彦著「新たなる金融危機に向かう世界」（徳間書店・1680円）
⑥広瀬隆著「二酸化炭素温暖化説の崩壊」（集英社・735円）
⑦畠中恵著「ゆんでめて」（新潮社・1470円）
⑧池上彰著「伝える力」（PHP研究所・840円）
⑨柴田トヨ著「くじけないで」（飛鳥新社・1000円）
⑩宋美玄著「女医が教える本当に気持ちのいいセックス」（ブックマン社・1500円）
11日・三省堂神田神保町本店調べ

今週のBOOKランキング

●県内

今週7位は「あんじゅう　三島屋変調百物語事続」です。江戸は神田、三島屋の「黒白の間」では、胸に「不思議」を抱えたお客さまが、秘密をひそやかに語っていく。心を閉ざしていたおちかにも少しずつ変化が。ほっこり温かく、ちょっと奇妙で、ぞおっと怖い、百物語が始まります。

「シルクのべっぴん塾」は、驚くほどのツヤ肌と若ボディーで年齢不詳の美しさを誘るシルクさんが、誰もが手軽にできて、効果的な若顔&美ボディーのメソッドを大公開！　美は1日にしてならず。あきらめなければ若返りも幸せもかなう。べっぴん哲学、シルク美容の集大成です。

●東京

1位は直木賞受賞作。戦中戦後の日本が丁寧に描かれているので、年配の読者も多いです。

書店から一言

オケとの対話を大事にしたい

昭和30年代に八木一夫や熊倉順吉らが推し進めた、「用いる」器物を超越したクレイワーク＝陶磁土による造形。これが日本の現代陶芸の黎明と言える。以降、従来型の陶芸の縛りから解き放たれるように、多種多様な表現が誕生した。

八木一夫「黒陶　環」はブラックホールのような重力感がみなぎる、陶芸史上の記念碑的な傑作。松本ヒデオ「囲み取って賞でるIX」はなじみ深い瀬戸物の素材感を生かしつつ、11本の柱と5枚の薄い陶磁板で構成されている。池、海、草地、風までが見え、空想の世界に誘われる。

また人間国宝の三代徳田八十吉「燿彩鉢　創生」は、鉢という小宇宙の中で、黄、緑、青の九谷焼の三原色が鮮やかな現代の輝きを放っている。

小刻みな時世の空気を反映しながら、作者の知恵と工夫の数だけ新しい作品が生まれる。そしてそれが見る者を楽しませ、うならせる。

（県立ミュージアム学芸員・窪美酉嘉子）

松本ヒデオ「囲み取って賞でるIX」（45㌢×120㌢×200㌢、1991年―半磁器）

耀くわざと美　❸現代陶芸の開花

「耀くわざと美―日本工芸のいま」は9月5日まで高松市玉藻町の同ミュージアム。入場料は一般800円ほか。問い合わせは同ミュージアム、電話087（822）0002。

「大谷康子＆大阪交響楽団コンサート」は三豊市詫間町のマリンウェーブマーガレットホールで21日午後7時開演、さぬき市鴨庄の市志度音楽ホールで22日午後2時開演。入場料は2公演とも一般3000円ほか。問い合わせはマリンウェーブ、電話0875（56）5111、志度音楽ホール、電話087（894）1000。

21日・三豊　22日・さぬき

ここはとても順調で、意欲的な企画をしている。コンマスの森下幸路さんとも親しく、本番を心待ちにしている。初共演と言っても同じ音楽の好きな仲間同士。一体感のある演奏ができるだろう。

―香川では15年ほど前から何度も公演を開いている。聴衆の印象は。

特に声楽分野に多くの優れた出身者がいて、ピアノの国際コンクールも開かれる「音楽県」。当然、聴衆のレベルもとても高い。今回はトークを交えた分かりやすい内容にする。クラシックに触れる機会のない人も会場に足を運び、もし良ければ拍手を送ってほしい。

―クラシックは難しいと敬遠する向きがある。

例えば楽章の間に拍手が起きた時、その観客をにらんで演奏をやめてしまうプレーヤーがいる。でも私はそういうことを気にしない。鑑賞の「マニュアル」を意識するあまり、音楽を楽しめないのではコンサートの本質からずれてしまう。自分の心で自由に楽しんでくれたら、私はうれしい。

谷本采香

岩田瑞加

総勢200人「生きる喜び」

KJO定演、初の「第九」

アルファあなぶきホールを拠点にする「かがわジュニア・ニューフィルハーモニック・オーケストラ」（KJO）が今夏の定期演奏会で、ベートーベンの「第九」を初めて演奏する。合唱団を合わせて過去最も多い200人超の公演になり、創立から9年間のすべてを込めて古典派最大の傑作シンフォニーに挑む。

KJOは小学生から大学生まで約60人が在籍。今回は音楽交流を続ける台湾・国立武陵高級中学管弦楽団の10人と、OB・日松29高を含む約100人の編成になる。合唱は公募の参加者と、秋の「かがわ第九演奏会」の合唱団、オペラ合唱を追究する「高松マスターズコーラス」の団員ら計約110人。

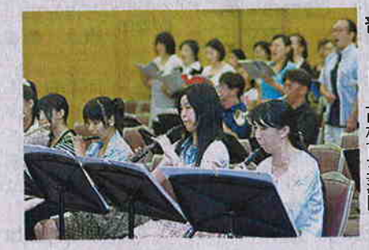
ソリストは国内声楽界の最前線で活躍する香川ゆかりの4人で、宗教音楽などで国際的な評価を得るソプラノの佐竹由美をはじめ、アルトの永井和子、テノールの行天祥晃、バリトンの久保和範を迎える。指揮は楽団永久桂冠指揮者の山本直純に最後に師事した平井秀明が8年連続で務める。

9回目の定演になるのに合わせて「第九」を選曲。日本では年末の風物詩として終楽章の「歓喜の歌」が広く愛好されるが、古典派最大規模の重厚でダイナミックな音楽性に加え、生きる喜びや世界の平和など、深遠なテーマが込められた作品でもある。夏に取り上げるのは県内では珍しい。

コンサートマスターは1、2楽章が岩田瑞加、3、4楽章が谷本彩香（ともに高松一高2年）。

演奏会は高松市玉藻町のアルファあなぶきホール大ホールで29日午後2時開演。入場料は一般2000円ほか。問い合わせは同ホール、電話087（823）5023。

平井秀明指揮



指揮の平井秀明を迎えて行った合唱団との初の合同練習＝8日、高松市玉藻町

応募方法
抽選でWii、ニンテンドーDSi LLほかが楽しい賞品が当たる!!
夏休み期間中に親子で楽しめる情報「夏休み親子ノート」を20回

シリーズ7
しっと
夏休み

裁判員制度

【裁判員制度】

裁判ってしっ
など、悪いこと
なんだ。それは
ていたんだけど
裁判にふつうの
これを裁判員制
ふつうの人っ
みんなのお父さ
れないんだ。
裁判員制度
かというと、20
けど、選挙権の
中から抽選で
つ通知がくるか
でも、裁判の
いよね。選ばれ
うぶ、法律のこ
いことはプロの
いじなことは、
だって。だから
に考えることが
そうかあ、だ
困ることはな
れたらことわ
以上の人や病
いる人や、学校
せん」といえる
それに仕事
仕組みが用意
をかけたりする
裁判員が裁
強盗などとて
力月とか何年
だけ時間をか
夫されている
「裁判員制度
んにきいてみ